

+看護：わたしのSTORY+

2020年度から、看護職（看護師・助産師・看護補助者）に「思い出に残る看護エピソード」の募集を行い、優秀作品には表彰を行っています（看護部「看護を語る会プロジェクト」主催）。多数の作品の中から一部を紹介いたします。

コロナ禍では、それまでの当たり前がそうでなくなるという、現場で働く看護職にとってもさまざまな苦悩もありました。それらについて触れたエピソードもあります。

当センター看護職の「どのような状況下でも患者さんに寄り添う」思いや経験をご一読ください。

今もまだ 面会でできぬ寂しさを 荷物に託す 家族の思い I（看護補助者）

（コロナ禍で詠まれた歌です。現在ご家族は面会できています）



思い出に残る看護エピソード

C (看護師)

これまでの看護師としての経験を振り返ると、自身は患者・家族に手で触れて情報（体温や湿潤、脈などのいわゆる触診も含めて）を得て、またタッチングという技法で看護を行っていたと思う。それは、学生～1年目に意図的に行っていたものの、ここ数年は無意識に行う程までに。

コロナ患者さんの対応では、素手で触ることなんて決してしない。感染対策として当然だ。私は数カ月にわたりコロナ病棟に配属となりコロナ患者さんの対応をした時、心身共に何かが日々削がれるのを感じていた。正直、具体的に何がというわけではない。もちろん、病院全体で、社会全体で、そして家族や友人に十分に支えられ、闘っているのは一人ではないということは重々分かっていた。しかし、常に負の何かに追われていたように思う。

再び私が元の病棟での勤務を始めたとある日、呼吸が促迫し、「苦しい、怖い。」と訴える患者さんの手を握り、「ゆっくり深呼吸しましょう。大丈夫ですよ。」と声を掛けた。

患者さんは私の手を握り返し、「あなたの手あったかいね。」と。私の手は流水手洗いしたばかりだし、そして冷え性のため、決して温かくなっていなかった。むしろ、私は患者さんの手の方が温かかったくらい。患者さんの目を見ると、呼吸は穏やかになった。「こうしてみまもってもらえる？少し休もうかしら。」と、患者さんは目を閉じた。私は、とても泣きそうになった。

コロナ患者さん対応中の私は、これまで大切としてきた患者さんとの関わりこそが制限されたが故に、無気力に苛まれていたのだと思った。しかし、コロナ患者さんにとっての看護師の役割は元の病棟とは異なただけであった。その後、数日間コロナ患者さんの対応をさせていただくことになり、ケアやモニタリング等を通じて、生命を護っていることを実感した。決して、自身が無力ではなかったのだと思った。

依然として、コロナとの闘いは続いていく。いまこの時も、最前線で働く多くのスタッフへ、心からの感謝を伝えたい。

看護の思い出

M (看護補助者)

私がその患者さんと初めてお会いしたのは今から数年前になります。当センターに勤め始めて間がない私は緊張の日々を過ごしていました。少しずつ患者さんとのコミュニケーションが取れるようになって来た頃、コロナの流行に伴い面会も制限され、ご家族の面会も長時間できなくなりました。その頃から患者さんは不穏になり、午後になると落ち着かない時間が増えていきました。車椅子で病棟の廊下をお散歩している時に、ラウンジからの景色を眺めながらご家族のことをお話してくださいました。お部屋に戻りたくない、廊下を何周もしたのを思い出します。私が仕事のため戻らないとわからない事を告げ、ベッドに戻っていただいた時にはとても寂しそうな顔をされ、「あなた何時まで？」「また来てくれる？」「明日も来る？」と私の手を握りお話しされていました。これまではご家族と自由に面会できていましたが、おひとりの時間が増えてとても不安で寂しいだろうなと感じていました。できる限りお散歩やお部屋での見守りをして、寄り添いたいと思っていました。

ご家族との短時間の面会と交代する日々が定着してきて、ご家族からも「ありがとうございます。」とお言葉をいただき、信頼されつつあるのかと嬉しくなりました。ご家族の顔を見ると安心した表情をされ、家族の存在は偉大だなと改めて実感しました。また時には泣きながらご家族にお電話をして「いつ来る？」と訴える患者さんを愛らしく思えました。

患者さんは徐々にケアを嫌がり、時には叫んで拒否するようになってきました。私も看護師とケアに入って嫌がる患者さんの手を握り、少しでも気が紛れるように介助しました。

そんな日々の中、まさか最期になるとは思ってもなく洗髪をさせて頂けたのは私にとって感謝でしかありません。お別れもさせて頂けたこと、ご家族にもご挨拶ができ患者さんの人生のほんの一部ではありますが携わることができ、私にとって忘れることのできない患者さんです。ですが、心残りがあります。病棟の中をグルグルすることしかできなかったのが残念でした。本来ならば暖かい日は外気を感じて、桜や木々を鑑賞しながら散歩して気持ちを癒して差し上げたかったです。

俳句が見つないだコミュニケーション

N（看護師）

80代の患者さんは緊急入院、血液透析導入となった。私は、患者さんが身体症状の変化や透析治療に対してどのような思いを抱いているのか把握が難しいと感じていた。またコロナ禍で面会制限がある中、ご家族が患者さんの治療方針に強い不安を抱いていたことも気がかりであった。

ある日私は入院病棟に支援に行く機会があった。生活の場で会う患者さんは、透析治療の場とは異なり穏やかな様子であった。患者さんが外来で「俳句が好き」と語っていたことを思い出し「一句お願ひできますか」と問いかけてみると、嬉しそうな表情で「看護師の 一斉衣 夏仕立て」と詠んでくださった。私は患者さんのクリアかつスムーズな返答に驚いた。そしてこの患者さんの得意分野を対話に活かせないか、と考えた。そこで患者さんに透析に関する俳句をお願いすると快諾された。

翌日の透析時、患者さんは「静かなる 終える透析 山笑う」と食札裏に書き留めた俳句を披露してくださり「山笑うが初夏の季語」と笑顔で教えてくださった。この時、私は患者さんが治療の必要性を理解され、受容し、透析治療を受けられていることを知り、安堵の気持ちを感じた。スタッフ間でも俳句から読み取れる治療への思いを共有し、俳句を話題に患者さんと積極的なコミュニケーションをとるようになった。導入期指導も俳句にのせ「食べてよし 特上鰻重 ハーフサイズ」「夏野菜 塩揉みよりも マヨネーズ」など嗜好に合わせた食事の工夫を提示した。患者さんは「腎機能 一喜一憂 クレアチニン」「外食は 控えようよ 塩分管理」と詠み、腎保護について理解されていることが伺えた。

ご家族が来院された際、透析中の様子とともに患者さんの俳句を見ていただいた。「想像していたよりも父が苦痛なく透析できていることがわかり、安心しました」と不安が軽減されたようだった。患者さんとの俳句のやりとりは退院まで続き、退院時には「けふ退院 ありがとう 一期一会 さくらんぼ」と温かい俳句を用意してくださった。私は感動し、看護師をしていてよかったと改めて実感した。現在も機会があるとスタッフが俳句を詠んでおり、その度にみなで患者さんのことを思い出している。

私の思い出に残る看護『手の温もり』

S (看護師)

私は10歳のある日の授業中、腹痛に襲われた。弟が肺炎で入院していた診療所に受診したところ、虫垂炎であることがわかり、その日のうちに手術することになった。腰椎麻酔だったので、手術中も意識はあった。手術台の上で両手を横に伸ばした状態で臥床し手術が始まると、手術の間ずっと、一人の若いナースが私の手をやさしく握ってくれた。ナースの手は温く、心強く感じた。母が弟の病床にいたことが多かったため、私が不安そうに見えたのかもしれない。

月日は過ぎ、私は看護師として勤務し〇十年となった。2, 3年前に血液内科病棟に異動し、同種移植を受ける患者をプライマリーナースとして受け持った。患者さんは大学生の青年で、まだどこか少年らしさが残っていた。病勢が強く、同種移植をするしか助かる方法がない状態だった。移植は無事に終了したが、化学療法の副作用の他、移植後合併症など厳しい状態が続いた。同種移植を受ける患者さんはバイオクリーンルームに入り、感染防止のため面会はできない。その方も体が少し楽になった時に母親とメールでやり取りをする程度で、一人で頑張っている様子であった。口内炎の痛みで話すこともできない状態であったが、医療用麻薬の投与が始まり少し痛みが緩和してきた。そんなある日、病床に訪室するとその患者さんは「手を握って。」と言った。身体の辛さや病状の厳しさもあり、精神的にもかなり辛かったのだと思う。私はベッドの脇に座り、その方に言われた通りに患者さんの手を握った。すると、「安心する。」と言われた。本当によく頑張っていると思うと、その患者さんに伝えた。私は最初、片手でその方の手を握っていたが、もっと握ってあげたいような気持ちになり、もう片方の手も患者さんの手の上に乗せた。すると、その方は「上のほう（の手）は要らない。」と言われ、思わず少し笑ってしまった。良かれと思ってした事だが圧迫感を感じたのかなと思い、片手でしばらく手を握っていた。「次はいつ来る？」「また来てほしい」と言われ、次にまた訪室することを伝えて病室を出た。それから少し経って、その方は病状が悪くなり永眠された。私にとって思い出に残っている看護は、手の温もりを感じたり、その温もりを通して心が通うようなものだなど改めて感じた。直接手を触れなくても、看護を通し心が近づく経験は、受けるほうも提供したほうも温かな気持ちになると思う。

最近、医療業界にもAIが参入してくるという話題を聞くと、私もいつか温度調節ができるやわらかい素材でできたロボットに手を握られる日が来るのだろうかを考える。私のあらゆるデータがインプットされ、絶妙なタイミングや表情・言葉で看護される日がくるのだろうか。人間にしかできない看護について、考え続けていこうと思う。

それ、看護計画に入れます

T (看護師)

桜の綺麗な年の4月でした。乳がん末期の患者さんの受け持ちをしていた土曜日の午後でした。ラウンドで訪室すると、廊下側のベッドだった患者さんは窓際を見ていました。外は桜が散り始めており、綺麗にひらひらと舞っていました。患者さんは私の訪室に気づかないかのように窓の外で舞っている桜にくぎ付けでした。その姿に『家内は花が好きで、特に桜が好き』というご主人の言葉を思い出しました。今年の桜が患者さんにとっては最後の桜…そう思うと悲しい気持ちになり、いたたまれずナースステーションに戻りました。

誰かに聞いて欲しくて、ナースステーションにいたその日のリーダーナースに自分の見た光景と患者さんにとっては最期の桜になることを話しました。すると、そのリーダーナースは『私達で見せてあげたい。見せてあげるべきですよ。今日、これからだと時間も無いし、無理だけど、明日の日曜日に計画しましょうよ。』とってくれました。その会話を聞いていた後輩看護師が『私、患者さんのプライマリーです。それ、看護計画に入れます。今、ちょっとだけ時間取れますか？』とってくれ、その場でショートカンファレンスが始められました。患者さんの体力を考え、ベッド毎移動し、一番綺麗に見える1階放射線科まで、午後の時間帯に看護師1名と看護助手1名で移動。出発する前に痛み止めの点滴を投与する。具体的な内容が決まり、看護計画とプランが立案されました。そして、その看護計画は翌日実行されました。患者さんは『桜が綺麗だった。今まで見た桜のなかで一番綺麗だった。』と訪室する度にどの看護師にも言われていたそうです。

私は正直、患者さんに桜を見せたいとは思ったもののどうすればいいかわからなかったのも、自分の思いを聞いて欲しくてリーダーナースに話したのです。それを愚痴の延長ではなく、現実化できたのは後輩看護師たちの行動力です。患者さんに今、必要なケアと捉えたリーダーナースの判断力です。そして、患者さんに桜を見せてあげたいと思った看護師全員の温かい気持ちです。

出来ないのではないか、無理なのではないかと既存の考えしかできなかった私が後輩看護師たちから看護の可能性を感じた私の忘れられない看護エピソードです。

こんな素敵な後輩看護師たちと一緒に看護ができることが、とても頼もしく、とても楽しいと感じています。

思い出に残る看護

Y・F・I（看護補助者）

未だに続いている世界の国と国との戦争をTVで見る度に、何年か前に入院されていた患者さんのことを思い出します。

その患者さんは中東の旅行中紛争に巻き込まれ、粉碎骨折のため大腿骨固定術を受けました。傷口の治癒に時間がかかり、長さ30cmはあろうかと思われる棒がX状に創外固定されていました。医療の専門職ではない私たちにとって、棒が入っていて痛くないのか？なぜ血が出ないのか？など初めてお会いした時に思いましたが、聞けませんでした。感染症を繰り返し2年という入院生活を送る中で、たまには入院生活やスタッフの愚痴を漏らすこともありました。私たちは話を聴くことしかできませんでしたが、それでも患者さんにとってすこしでもストレス発散、心の支えになればと思っていました。今となってはもっと話を聴いてあげられたのでは？と思いますが、その時は病棟の忙しさから時間に余裕があれば優しく、余裕がなければササッと去ってしまうこともありました。

そのような中でも患者さんはリハビリ帰りに行く散歩を楽しみにされていて、日本人にとって特別な意味を持つ満開の桜、夏の新緑、黄色に染まった秋のイチョウの木、雪が積もった松の木など唯一四季の風を感じられる時間を散歩しながら共に過ごしました。

2年という入院生活が過ぎる頃、創外固定のままではありましたが、松葉杖で歩けるまでに回復しリハビリ病院へ転院されました。転院後、今後の人生の不安や入院中の出来事、感謝などを記したお手紙を送っていただきました。患者さんとの出会いで教えていただいた「患者さんに寄り添う看護」ができるようにこれからも努めてきたいです。

戦争が続いている国にも患者さんが入院中に見た四季の色が早く訪れて、笑顔で暮らせる日が来ることをきっと患者さんは願っていることでしょう。そして私たちも患者さんが笑顔で過ごされていることを切に思います。

高次機能障害に伴い失語がみられた患者さんへの看護

K（看護師）

2021年に入職し配置された病棟は、コロナの流行拡大、第5波の到来により、コロナ患者さん専用の病棟となりました。日々様々なコロナ患者さんと関わる中で最も印象に残った患者さんについてお伝えします。

その患者さんは、高次機能障害に伴い、失語、理解はできるが表出することが困難という現状にある方でした。その日私は夜勤の受け持ちとして患者さんを担当し、バイタルサイン測定や神経学的所見の観察、勤務交代に伴い夜間帯の担当者であることのご挨拶のため訪室しコミュニケーションを図ろうと試みました。患者さんご本人は看護師の訪室時、表情が明るくなり、一所懸命に今伝えたいことを看護師に伝えようとしてくださいました。しかし、単語は出てくるが文として伝えることが難しい様子があり、くみ取った言葉を拾い上げ、こういことですかね？と再度聞き返しますが、私自身がくみ取り理解したことと、患者さん自身が伝えたいことに相違があり、うまくコミュニケーションをとることができませんでした。また、患者さん自身も自分がうまく伝えられないことにつかりし落胆する様子が見られました。「私がうまく聞き取れなくてごめんなさい。時間をかけても伝えたいことをしっかり理解するように頑張ります。一緒に頑張ってもいいですか？」と患者さんに声掛けを行い、最終的には医師から現状や今後の経過について説明して欲しかったという理解することができました。お互いの意思が通じた時には患者さんとともに喜び、嬉しい気持ちを共有することができたことを今でも覚えています。

コロナ患者さんは、個室隔離での療養生活となります。そのため、看護師の訪室時間にも制限があり、気楽に他者とコミュニケーションを図ることが制限される状況となります。どんな患者さんに対してもコミュニケーションは時間や情報共有の大切な手段であること、いくら意思疎通の方法に壁が生じて諦めない姿勢を持ち、患者さんに関わることの大切さを学びました。コミュニケーションを看護師としてそして人として、これからも大切にしていきたいと思えます。